

テキスト サムエル記上 20章

聖書には友情を表す言葉がありません。ヘブライ人は、それを「契約を結ぶ」という言葉で表現しました。「ヨナタンはダビデを自分自身のように愛し、彼と契約を結び、着ていた上着を脱いで与え、また自分の装束を剣、弓、帯に至るまで与えた」(サムエル上18:3-4)。こうして、ダビデとヨナタンの友情は結ばれました。

このダビデとヨナタンの友情を記す美しい物語は、サムエル記全体の流れからいえば、王位に関わる問題として取り扱われています。ペリシテ人との戦いに勝利して宮廷に召し抱えられることになったダビデは、民衆の間でも、王の宮廷においても、誰にも愛され、尊敬を集めました。そのゆえに、サウル王はダビデに嫉妬し、殺意をいだくようになりました。その結果、ダビデはサウルの迫害から逃れるため、宮廷を去り、難民として荒野を逃げまわらなければなりません。

そのようなダビデに、ヨナタンが命を救うために彼の逃亡に援助の手を差し伸べ、変わらない友情を表したことを、この物語は伝えています。

20章13~15節のヨナタンの言葉は、彼が次の王位につくのが自然なのに、ダビデのためにそれを放棄し、彼を助け、ダビデにより、自分とその家の将来を託そうとするものです。ヨナタンの名には「主は与えた」という意味があります。ダビデに対する主の愛顧がヨナタンの友情を通して表されます。

新月祭の時に示す態度で、サウルが本当にダビデの命を狙っているか確かめるべく二人は行動しますが、ヨナタンはダビデに一つのことを要望しました。それは、ダビデが王位についた時、自分と自分の子孫に対して、慈しみの態度を示して欲しいという要望です。それは、新しい王は古い王家一族の反逆の芽を根絶やしにするため、残虐な仕打ちをもって臨むという風習を踏まえての嘆願でありました。二人の友情は、根底に契約が存在します。ダビデはこの契約に誠実です(サムエル

下9章)。

ヨナタンは、本来なら自分が来るべき王となるはずなのに、ダビデこそ王にふさわしい人物と認め、彼の慈しみに期待し、自分と自分の子孫の命を預けています。ダビデこそ主の選びの器であるという信仰があったからです。ヨナタンは「ダビデを自分自身のように愛していたので」(17)、ダビデにその命を預けます。命を預けるという行為には、そのような信仰が必要です。ヨナタンは、「わたしとあなたが取り決めたこの事については、主がとこしえにわたしとあなたの間におられる」(23)と言って、それが決して破り得ない取り決めであることを強調しました。

新月祭の時、限られた者だけがつくことが許される王の食卓が用意されました。用意されたのは、王サウル、王子ヨナタン、王の従兄弟で軍の長アブネル、そしてダビデが座る四つだけです。しかしその最後の席にダビデはいません。ヨナタンからその理由を聞いたサウルは激怒し、ヨナタンを激しく罵倒し、槍を投げつけました。ヨナタンは、父の態度を見て父が本当にダビデを殺そうとしていることを知り、ダビデにそのことを伝えます。

二人は口づけし、共に激しく泣き、二人とその子孫との間には、主が共におられることを確認して、断腸の思いで別れます。激しく抱きあい、口づけして、共に泣く、その姿は実に感動的です。この後、二人は再会することなく別の道を歩みますが、とこしえにいます主が二人の間を取り持ち、その友情を支え、離れ離れになっても、二人を強く結びつけています。両者の間には、常に主が聖なる橋のように結節点として存在しています。後にサウルとヨナタンがギルボア山の戦いで戦死したとの報を受けたとき、ダビデは、ヨナタンの友情を、「女の愛にまさる驚くべきあなたの愛」(サムエル下1:26)と言って、哀歌を歌っています。

(鳥井一夫)

※第25号(6月10日聖書研究)からの再掲載です。

テキスト サムエル記上 20章  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問4, 65

### 〔単元のねらい〕

ダビデとヨナタンの友情の物語である。子供たちにとっては最大の関心事のひとつである〈ともだち〉がここでの主題となる。主イエスとの交わり、人と人との交わりの恵みを分かち合いたい。

## 「〈ともだち〉になろう」

ダビデは巨人のゴリアトを倒してヒーローになりました。けれども、サウル王はこのためにダビデを妬んで、憎み、そして、ダビデの命さえ狙うようになります。このことは、ダビデにはとても辛く悲しいことだったでしょう。

しかし、このダビデを助けたのがサウル王の子ヨナタンでした。ヨナタンとダビデは友だちになって、ダビデにこんな約束をしました。「お父さん、君のことを本当に殺そうとしているのかどうか確かめてみよう。でも、もしお父さんが君のことを憎んで殺そうとしても、ぼくは君のことを守ってあげる」。ダビデはどんなにうれしかったでしょう。こうしてダビデとヨナタンは、どんなことがあっても友だちで居続けることを約束したのです。

翌日、ヨナタンはお父さんのサウルが、本当にダビデを殺そうとしていることを知ります。そこで、ダビデが隠れている野原に行き、弓矢で矢を放ちました。「ピューン」（一本目）、「ピューン」（二本目）、「ピューン」（三本目）。そして、家来にその矢を拾いに行かせて、大きな声で叫びました。

「矢はもっと先だー」。これは、ダビデとヨナタンの間だけでわかった暗号でした。「お父さんがダビデの命を狙っているから、逃げろ」という意味でした。ダビデは逃げました。「ヨナタン、ありがとう！」心の中で感謝しながら……。

こうしてダビデは、ヨナタンに守られ、無事にサウルの手から逃げ、命を助けられました。ヨナタンはともだちを命がけで守りました。二人はこ

の先も色んなことがありましたけれども、ずっと〈ともだち〉だったのです。

〈ともだち〉がいるってすばらしいこと。〈ともだち〉と一緒に遊ぶのも楽しいね。つらいことや悲しいことがあっても、〈ともだち〉に励まされることもあるよね。〈ともだち〉に悩みを聞いてもらったりするとすごく安心します。ダビデとヨナタンもそんな〈ともだち〉でした。

でも一番、たいせつなことは、〈ともだち〉から何かをしてもらうことではなくて、あなたが〈ともだち〉に何をしてあげるかです。わたしたちはどうしてか、いつも自分がしてもらうことばかり、求めがちになります。でも、ほんとうの〈ともだち〉は自分が、してもらうことばかりは求めません。目の前にいる〈ともだち〉がほんとうに、何を必要としているのか、何をしてほしいと思っているかということにも、心を向けます。

〈ともだち〉というと、みんなは「わたし」と「あの人」という1対1の関係のことばかりを思うかもしれませんが、きょう、教会に集っているみんなに知って欲しいことがあります。〈ともだち〉の関係ってというのは、それだけじゃないということ。では为什么呢？

それは、「わたし」と「あの人」の間に、「神さま」が入ってくださるということです。ダビデとヨナタンが、何があっても仲良しで居続けることができたのは、神さまに間に入ってもらっていたからです。二人は神さまの前でともだちであるこ

とを約束しました。そして、神さまが支え続けてくださったからほんとうの〈ともだち〉で居続けることができました。

先生は、こどもの頃になかなか〈ともだち〉ができずに悩んでいたことがあります。とつても、さびしいなあ？ と思っていました。自分だけのけ者にされているように思っていたこともあります。せっかく〈ともだち〉になっても、喧嘩をして離ればなれになってしまったこともありました。

みんなの中にも、「ぼくには〈ともだち〉がないなあ」、「わたしには〈ともだち〉がないなあ、さびしいなあ」という人もいるかもしれません。でも心配しないでください。大丈夫ですよ。イエスさまを信じて教会に集っているみんなにも必ず〈ともだち〉ができます。

先生も教会に来て〈ともだち〉できましたよ。それは誰でしょう？

一番の〈ともだち〉はイエスさまです。

イエスさまが〈ともだち〉っていうのはおかしいかな？ イエスさまは神さまであっても、〈ともだち〉ではないと思うかもしれません。

でも、イエスさまは〈ともだち〉になってくださったのです。ほんとうの〈ともだち〉です。ぼ

くたちを命がけで守ってくださる、そんな〈ともだち〉。ちょうど、ヨナタンがダビデを守ったような〈ともだち〉です。イエスさまはどんな時も、わたしたちと一緒にいてくださる〈ともだち〉です。このイエスさまを知って本当によかったと思っています。そして、イエスさまは、みんなに「〈ともだち〉になろうよ」と言っておられるのですよ。とてもすばらしいことですね。

教会でできた〈ともだち〉もいます。教会の〈ともだち〉は特別、たいせつな人です。神さまを信じている〈ともだち〉。みんなも教会に来ていると教会できっと〈ともだち〉ができますよ。この教会だけではなく、中会の他の教会に〈ともだち〉が見つかるかもしれませんね。ダビデとヨナタンのような〈ともだち〉がわたしたちにもできますように。

今は、すごく〈ともだち〉ができずにさびしいなあ、そんな寂しい思いをしている人たちが、たくさんいるように思います。みんなの周りにもそんな人がいるかもしれません。大人の人たちにもたくさんいます。その人たちのためにもお祈りしましょう。ひとりでも多くの人たちにイエスさまのことを知って欲しいです。 (橋谷英徳)

---

[今週の暗唱聖句] サムエル記上 20章42節

わたしとあなたの間にも、わたしの子孫とあなたの子孫の間にも、主がとこしえにおられる。

---



## 〈ねらい〉

神様に信頼して歩んでゆくときに、神様は素晴らしい友だちを与えて、ほくたち私たちを助けてくださいます。今日はダビデとヨナタンの友情物語から、お友だちの大切さについて、御言葉に聴きたいと思います。

## 〈展開例〉

みんな、お友だちがいるかな？ どうだろうか、本当に大切なお友だちをもっているかな（しばらく考えさせる）。

ダビデは、ゴリアトを倒して、一躍イスラエルのヒーローとなりました。多くの人たちが、ダビデの周りに寄って来ました。そして、ダビデをほめたたえました。

「女たちは楽を奏し、歌い交わした。『サウルは千を討ち／ダビデは万を討った。』」（18:7）。

女たちが歌い交わしたこの言葉が、サウルの心を傷つけました。そして、サウルはダビデのことがきらいになって、ダビデのことを憎むようになりました。そして、ダビデの命さえ狙うようになってしまったのです。ダビデはサウルに対して何もしていません。でも、一方的に命をつけ狙われていくようになってしまったのです。このことは、ダビデにとって、どんなにか辛いことであつたでしょうか。

その間に立ったのが、サウルの子ヨナタンでした。自分のお父さんが、自分の心からの友だちの命をつけ狙っているのです。このことは、ダビデを辛くしただけではなくて、自分のお父さんと友だちの間に立つヨナタンを苦しめました。そし

て、ヨナタンは、お父さんがダビデを本当に殺そうとしているのを知るのでした。

ヨナタンは、ダビデが隠れている野で、弓矢を射ることにしました。これは暗号でした。三本の矢を射るのです。そして、それがダビデが隠れている所よりも、もっと先に落ちれば、それは、サウルがダビデを殺そうとしているという暗号でした（37）。ヨナタンはダビデに逃げろ！！と声をかけました。

「従者が帰って行くと、ダビデは南側から出て来て地にひれ伏し、三度礼をした。彼らは互いに口づけし、共に泣いた。ダビデはいつそう激しく泣いた」（41）。

こうしてダビデは、ヨナタンの温かい愛の心によって、サウルの手から守られました。

「ヨナタンは、ダビデを自分自身のように愛していたので、更にその愛のゆえに彼に誓わせて」（17）と聖書は言っています。ヨナタンはダビデのことを自分のことのように愛していたので、お父さんとの板挟みの中でも、ダビデを心から助けることができました。

神様は、ほくたち私たち一人ひとりにも、素晴らしいお友だちを与えてくださいます。そして、折りにかなった助けを与えてくださるのです！！

## 〈お祈り〉

天の父なる神様。ほくたち私たちにも、素晴らしいお友だちを与えてくださって、心から感謝をいたします。主イエス・キリスト御名によってお祈りします。アーメン。



**〈ねらい〉**

友情、信仰のきずなに結ばれた友だちが与えられることを求めよう。

**〈展開例〉**

羊飼いのダビデはサウル王の家来になりました。彼は主をおそれ、豎琴がうまく、また、ペリシテ軍の巨人ゴリアトを倒すほど強く勇ましい若者でした。サウル王の子供ヨナタンとダビデは親友になり、ヨナタンは上等な王子の上着や武器などを与え、自分の命のようにダビデを愛しました。ところが、ダビデが戦いで手柄をたて、だんだん有名になってくると、サウル王はダビデを憎むようになったのです。サウル王は何度もダビデを殺そうとし、ついに槍を投げつけました。ヨナタンは夜中にダビデを遠い荒野に逃がしてあげました。

ダビデはサウル王の追跡を逃れて、荒野をさまよいましたが、主を信じ、サウル王を少しも恨みませんでした。

その後、サウル王とヨナタンはペリシテ軍との戦いで戦死してしまいました。ダビデの悲しみはどれほどのものだったでしょう、親友が亡くなってしまったのです。

わたしたちもさまざまな出会いと別れを経験します。大好きなペットとの別れ、仲良くなったお友だちの引越し、それらすべては神様のご計画です。心から信頼できるお友だち、同じ信仰を持ったお友だちも神様が与えてくださいます。

それにもまして、わたしたちの人生の最後まで、ずっと変わらずにお友だちでいてくださるお方はイエス様です。イエス様はわたしたちが神の国に入るまで導いてくださいます。

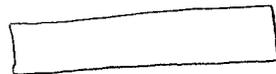
**〈お祈り〉**

神様。わたしたちに日曜学校のお友だちを与えてくださり感謝します。また、イエス様がわたしたちの友だちとなり、わたしたちを救ってくださることを感謝します。アーメン。

**〈やってみよう〉****○作ってみよう**

用意するもの……画用紙、色マジックか色鉛筆、ハサミ  
作り方

①画用紙を細長く切る。



②切った紙を半分に折り、またそれを半分に折る。

(これは自由に何等分してもよい)



③「手」になるところがつながるように人の輪郭を描き、ハサミで切る。



④大切なお友だち、教会のお友だちなどを思い浮かべて、顔を描いたり色塗りする。



☆一人のお友だちと自分の場合は、半分に折ればいいね！

描きたい人の人数にあわせて折る数を考えよう。

**〈ねらい〉**

ダビデとヨナタンはともに神様を心から信頼し、信じていた。だから二人の友情の根底には愛と憐れみと恵みに富みたまう神がいつもおられた。そのような二人は離ればなれになっても、どんな状況下にあってもその友情は温かく強く固く結ばれていて崩壊することはない。

**〈展開例〉**

皆には友達がいるでしょう。その友達とはどのような関係でしょう。テレビで見た物語を話し合ったり、読んだ本の内容を話したり、ふだん思っていることを語り合ったり、楽しく遊んだり、時にはけんかをしたり、助け合ったりしていることでしょう。

そんな友達がいることは毎日の生活を楽しくするし、学校へ行くのも楽しくなるし、とても有意義なことですよ。

今日はダビデとヨナタンの美しい友情のお話をしましょう。

少年であったダビデはイスラエルとペリシテ人との戦いに於いて、命をかけて戦いました。そして、無敵と言われたペリシテ人の巨人ゴリアトを石を投げて倒し、イスラエルに大勝利をもたらしました。この勝利の背後には神様の力が働いていることは忘れてはなりません、その結果、ダビデはサウル王の宮廷につかえるようになり、そこでヨナタンと初めて知り合ったのです。

イスラエルに勝利をもたらす働きをしたダビデは国民の間に大いに尊敬され、サウル王よりも人気がありました。サウル王はそのことでダビデに嫉妬し、彼を殺害しようと計画します。そのことをサウル王の息子であるヨナタンは知り、自分が父サウル王にとりなすことをダビデに約束します。

ここでサウル王、ヨナタン、ダビデの関係を見てみると、ダビデは神様によってサウル王の次の王様になることを告げられています。サウル王は

自分の次の王は当然息子のヨナタンに継がそうと考えていたことでしょう。何故なら古代においては、新しい王は古い王家一族の反逆の芽を根絶やしにするために残虐な仕打ちをするという風習があったからです。そうなると、もしダビデがサウルの次の王となれば、サウル王一族は皆殺しにされると、サウル王は思っていたのです。

しかし、ヨナタンはダビデを王にふさわしい人、神様が王に選ばれる人物であると認め、ダビデを自分自身のように愛していました。そしてダビデが王位に就いたとき、自分と自分の子孫に慈しみの態度で臨んでほしいと要望します。ヨナタンにしっかりした信仰がなければこのようには考えなかったでしょう。

ダビデはこの要望を受け入れ、誠実に実行していきます。ヨナタンとダビデとの友情には神様の恵み深い愛がお互いの思いや行為を通して表わされています。

サウル王のダビデに対する殺意が明確になったとき、二人はともに激しく泣き、二人とその子孫との間には神様が共におられることを確認し、断腸の思いで別れ、ダビデは一人で逃亡生活を送ることになります。その後、二人は再会することなく、別々の道を歩みますが、神様は、二人が離れていてもその友情を支え、強く結び付けられます。

後にサウルとヨナタンはペリシテ人との戦いで戦死しますが、ダビデはサウルとヨナタンを含む三人の息子の遺体を丁重に火葬に付しました。

**〈祈り〉**

神様。今子供たちの間で、いじめや孤立化が多くなっていると聞いています。どうか子供たち一人ひとりに神様のお導きによって信仰を与えてくださり、お互いに信じあえる友達をたくさん与えられ、ダビデとヨナタンのような友情を持ってみんなで仲良くしていくことが出来るようにしてください。

対話の手掛かりとして……。

①信仰の友が与えられることは、神さまから与えられる大きな恵みのひとつです。信仰生活は、決して自分ひとりで築き上げていくことはできません。教会共同体に代表されるように、信仰にある家族や友人が必要です。私も短いなりに信仰生活を振り返ってみると、多くの兄弟姉妹の支えや祈りがあったことに感謝しています。自分が気落ちしている時には、周りの仲間が自分に代わって神さまを賛美してくれました。その歌声や祈りに、巻き込まれる中で、段々と病んだ魂がいやされる経験をしました。

②ダビデとヨナタンの友情物語の背後には、ダビデに対するサウル王の憎しみ、妬みがありました。ダビデの活躍をよく思わないサウルは、ダビデの命を奪いたいと思うほどの妬みを持っていたのです（サムエル下19:9-11）。ダビデはサウルの殺意を恐れ、逃亡生活の苦しみの中にありました。ダビデが、生死の境目を彷徨っていた時に、彼を支えたのがサウルの息子ヨナタンでした。苦難や試練に陥っている時、信仰の友が与えられているというのは、ダビデだけではなく、私たちにとっても大事なことです。生死を分けると言っても、過言ではありません。

③私たちは、何をもって自分の友だちを「友」と呼ぶのでしょうか。趣味や性格が合うから友だちなのでしょうか。もちろんそれらは大事なことです。でも、考えてほしいのは、友だち関係が上手くいかなくなることもよくあるということなのです。友だち関係だけではなく、あらゆる人間関係において言えることですが、いったん、互いの関係にひびが生じると、修復することが困難になります。「私たちは友だちだから、家族だから大丈夫！」という理由ではどうすることもできません。友情の拠り所が、

もし人間の中にあるとするならば、それは極めて危ういものになってしまいます。

④では、ダビデとヨナタンの場合は、何がふたりを結び合わせていたのでしょうか。23節には、「わたしとあなたが決めたこの事については、主がとこしえにわたしとあなたの間におられる」とあります。42節には「主がとこしえにおられる、と主の名によって誓い合った」とあります。ふたりの友情を結び合わせていたものは自分たちではなく、神さまが共にいてくださるという恵みです。自分たちの決意の強さによってではなく、主が私たちたちを守ってくださるという信頼がふたりの中にあったのです。

⑤主イエスも、弟子たちのことを「わたしはあなたがたを友と呼ぶ」（ヨハネ15:5）とおっしゃってくださいました。ダビデとヨナタンの友情は（16節では「契約」と呼ぶ）、主イエスと私たちの間でも結ばれました。神さまは、私たちの友となってくくださるために、御子イエスをお遣わしになり、主はご自身の命を十字架でささげてくださいました。十字架の愛が、神さまと私たちの間に、まことの友情を造り出したのです。そして、キリストの友である私たちは、誰かの友になること、「互いに愛し合うこと」へと召されています（ヨハネ15:12）。

⑥信仰の友といえども、意見の違いがあり、時には憎しみが生まれることがあります。罪深い自分の惨めさに失望することもあるでしょう。信仰生活なんてどうせ綺麗事だ、ダビデとヨナタンの美しい友情なんて、私たちの間にはない関係のない話だと、思うってしまうこともあるかもしれません。しかしその時にこそ、思い起こしましょう！ まことの友である、キリストの十字架の愛を！